

『ジーニアス総合英語』のコラムの数は100

柏野健次



私は『ジーニアス総合英語』の編集主幹の1人として全体を校閲する一方で、コラムの執筆にも携わった。本文だけでなくコラムも充実させるため、英語学習の中級者であれば文法事項をさらに深く学ぶのに役立ち、初級者であれば英語に興味を持つきっかけとなるようなコラム作りを目指した。時にやや高度な内容も含むが、高校生にもわかるような説明を心がけた。生徒だけでなく教師にも何らかの「発見」があるものと自負している。

コラムには「Question Box」をはじめ、「比べよう」、「英語の発想」、「ライティングのコツ」などの種類があり、項目数は100を数える。どれも「コミュニケーション (のための英文法)」という観点からの執筆を試みた。

本稿では、このコラムの内容の具体例を紙幅の許す限り紹介する。どのように説明しているかは5月に刊行予定の見本をご覧ください。

■[英語の発想] please と「～してください」(第1章 文の種類)

please は相手がその行動をすることで話し手が利益を受ける場合に使うのが基本。

Please bring me a cup of coffee.

コーヒーを持ってきてください。

しかし、話し手でなく聞き手の利益になる場合でも、話し手が心をこめて相手に行動を促す時には、please を文頭で使える。

Please make yourself at home.

どうぞお楽にしてください。

話し手の利益にならず、話し手が心を込めて行

動を促すのでもない、指示や忠告を表す命令文には please をつけない。この点が日本語の「～してください」と違うので、注意が必要である。

×*Please go straight and turn left at that corner.*

×*Please take an aspirin for your headache.*

■[Question Box] Q「タイガースは明日の試合に勝つにちがいない。」を英語で言うと The Tigers must win tomorrow's game. になりますか。(第5章 助動詞)

「推量」を表す must は be 動詞などの状態動詞とともに使うのが基本で、動作動詞とともに使うとふつう「～しなければならない」という意味になる。したがって、Qの英文は「タイガースは明日の試合に勝たなければならない。」と取られるのがふつう。

Qの日本語を英語で表すには be sure to や be bound to を使うのが一般的である。動作動詞を使って未来のことについて「～にちがいない」をどう表すかは意外な盲点かもしれない。

The Tigers are sure [bound] to win tomorrow's game.

■[Question Box] Q 分詞構文はいろいろな意味で使えるので便利のように思います。英作文で使っても大丈夫ですか。(第9章 分詞)

分詞構文は主に書き言葉で用いられ、その意味は文脈で決まる。したがって、論理性を求められる文章ではあまり好まれず、あいまいさを残した

まま判断を読者に任せる小説で多く見られる。このようなことから、英語学習者が英作文で分詞構文を使うのは適切とは言えない。基本的に接続詞を使って意味をはっきりさせるように心がけた。ただし、「付帯状況」(「…しながら」「…して」)に関しては適切な接続詞がなく、分詞構文を使ってもかまわない。

ちなみに、小説では分詞構文は、「付帯状況」の意味で文末で使われることが圧倒的に多い。

■[Question Box] Q We could have talked all night. という文を見ました。if 節もそれに代わる表現もありますが、could have talked は仮定法ですか。(第12章 仮定法)

Qの英文は仮定法過去完了の例である。この文は、「(そうしようと思えば)一晩中でも話をしていられただろう。」という意味で、「そうしようと思えば」の部分が隠れた仮定の内容になっている。それくらい話がはずんだということで、実際にはそうしなかったことを表している。こういう例は数多く見られる。

cf. I could have been a good wife to Woody, but no one even gave me a chance. To them I was still a waitress. (私はウディのいい奥さんになることができたのに誰もその機会さえくれなかったわ。彼らにとっては私は所詮ウエイトレスだったのよ) — S. Sheldon, *Morning, Noon and Night*

■[比べよう!] ① My room is *no bigger* than a closet. / ② My room is *not bigger* than this room. (第10章 比較)

①のnoはbiggerという語を否定し、「広いどころか狭い」という意味で、than a closetによって部屋がどれほど狭いかを強調している。意味は「私の部屋は狭くて押し入れくらいしかない。」(=My room is as small as a closet.)となる。このように、「no+比較級」は多くの場合、

「as+反意語の原級」で書き換えられる。

一方、②のnotは文全体を否定し、「私の部屋がこの部屋よりも広いということはない。」という意味で、ふつう誰かがYour room is bigger than this room. と言ったことに対する反論として使う。

■[ライティングのコツ] 上手に使いたいwhat (第11章 関係詞)

①そこが野球の一番の魅力です。

②私の言い分も聞いてほしい。

上のような日本語を英語で表現する時は、「野球の一番の魅力」を「私が野球について一番好きなこと」、「私の言い分」を「私の言いたいこと」と読み替えることによって、それぞれ以下のように表現できる。

① That's *what* I like best about baseball.

② I want you to hear *what* I want [have] to say.

■[Question Box] Q 「彼がその部屋から出てきた」という意味でHe came from the room. と言ったらネイティブの先生からちょっと変だと言われました。「～から」はfromではないのですか? (第19章 前置詞)

fromは出発点・(移動の) 起点を表す前置詞で、例えば、He came *from* the countryside. (彼は田舎からやって来た。) のように言うことができる。しかし、部屋のような空間から「出てくる」という中から外への動きを表す場合は、fromではなくout ofを使ってHe came *out of* the room. と言う方がふつう。

次の文ではfromもout ofも可能だが、out ofではハンドバッグの「中から外へ」という動きが強調される。

Take everything *from* [out of] your purse.
ハンドバッグにある物を全部出しなさい。

(かしの けんじ・大阪樟蔭女子大学名誉教授)